

1	北海道上士幌高等学校	全日制	普通科	29
---	------------	-----	-----	----

平成 29 年度 高等学校における特別支援教育推進のための拠点校事業 実施報告書（成果報告書）（要約）

1 研究開発課題

高等学校における「通級による指導」の制度化に向けた準備に係る研究

2 研究の概要

本研究では、平成 30 年度からの高等学校における「通級による指導」の制度化に向けて、本校が平成 26 年度から平成 28 年度まで指定を受けていた「個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育事業」の研究成果を生かしながら、「通級による指導」における「自立活動」の指導内容、指導方法、指導形態及び評価方法について研究を行う。また、近隣中学校への周知方法や対象生徒の決定に向けたプロセスの研究及び、特別なニーズのある生徒の進路活動や進学先・就職先への引継ぎに関する研究を行う。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究開始時の現状分析と研究の目的

ア 現状の分析

本校には、LD や ADHD 等の発達障がいの可能性のある生徒など、特別な教育的支援を必要とする生徒が多数在籍しており、増加傾向にある。本校は、特別な教育的支援を必要とする生徒への支援として、平成 25 年度から「高等学校における特別支援教育支援員配置事業（道教委）」の支援員配置校の指定を受け、特別支援教育支援員による学習面、生活面等の支援を行うほか、本校教員と中学校教員との情報交換や特別支援学校教員を講師とした校内研修会を開催してきた。さらに、平成 26 年度から 3 年間、障害による学習上又は生活上の困難のある生徒の社会性向上などを目的に、文部科学省研究開発指定事業「高等学校における個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育事業」に取り組み、特別支援教育の充実に努めている。そのような中、これまでの研究開発から見えてきた課題として、①「自立活動」における特別支援学校学習指導要領と高等学校の教育とのギャップ、②小規模校であるが故の人員不足、③普通科高校の教員の特別支援教育に係る専門性の不足などがあげられる。また、近隣の中学校や保護者は、本校に特別支援学級があると思っているなど、高等学校における「通級の指導」について理解されていない現状が見えてきた。また、特別な教育的支援を必要とする生徒が卒業し、進学、就職していく上で、上級学校や企業、就労支援施設などとの連携を促進する取組を行う必要性がある。

イ 研究の目的

本事業では以下の 3 点について研究を行い平成 30 年度の制度化に向け準備をすることを目的とする。

- (ア) 「通級による指導」における「自立活動」の指導内容や指導方法、指導形態、評価方法といった指導計画の策定に関わる研究。
- (イ) 近隣中学校への適切な周知の時期や内容、方法と対象生徒の決定に向けたプロセ

スについての研究。

(ウ) 特別な教育的支援を必要とする生徒の高校生活への適応と、高校卒業後の進路活動について、他機関との連携の在り方に係る研究。

(2) 研究仮説

ア 本校に通級指導教室を設置して「自立活動」を実施することで、特別な教育的支援を必要とする生徒の学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識・技能・態度・習慣を育成することができる。

イ 近隣中学校に、適切な時期に正確な情報を周知し、中学校と高校が生徒の情報を共有することで、「通級による指導」における「自立活動」の対象となる生徒に対して、適切な指導が行うことができる。

ウ 教育の観点だけでなく医療や福祉などの観点を取り入れて行くことで、特別な教育的支援を必要とする生徒の高校生活への適応を多角的に支援できる。また、上級学校や企業、就労支援施設などとの連携を強めることで、対象となる生徒の高校卒業後への不安感を和らげ、進路希望実現への意欲を高めるとともに、高校卒業後の新しい環境において、対象となる生徒の適応に係る適切な支援を得ることができる。

(3) 必要となる教育課程の特例

教育課程の特例の内容	指導内容	授業時間数・単位数等
平成29年度は2年生に、平成30年度からは1年生に対して、放課後の時間に「通級における指導」を年間を通して週1回実施し、単位認定する。	一斉授業において、特別な教育的支援を必要とする生徒を対象に通級指導教室において、「ソーシャルスキルトレーニング」等を行う。内容は、生徒の実態把握を行った上で目標設定し、次の中から適切なプログラムを組み、実施する。 ① 自己理解及びストレスマネジメント ② コミュニケーショントレーニング ③ 自己管理トレーニング ④ 社会人に必要なマナー ⑤ 自己表現トレーニング ⑥ 特性に合わせた学習方法の確立	35単位時間、1単位（卒業単位に含むことができる）

(4) 通級による指導内容（指導の工夫等）

ア 指導内容

・コミュニケーショントレーニング

（表情と気持ちについて知る。人の感じ方、考え方について理解する。職場体験に向けた基本的知識・技能を身に付ける。地域貢献活動を企画・実施する。個人面接、集団面接に向けた練習をする。）

・スピーチ（夏休みの出来事、行事の感想）

・身体の動きに関わるトレーニング（身体感覚、力加減）

・自分に合った学習法の確立

・ライフスキルトレーニング（調理実習、見学旅行に向けた準備）

- ・活動の記録とファイルの管理
- ・文章作り（文章の構成、説明文、文字を丁寧に書く。履歴書を作成する。）

イ 指導方法

- ・分かりやすい言葉による説明
- ・口頭説明に留まらず、視覚的な情報等を組み合わせた分かりやすい説明
- ・授業始業時に目標など本時の流れを提示するなど、見通しをもたせる指導
- ・生徒が予想できる授業展開のパターン化
- ・「できた」「分かった」など生徒の達成感を重視した体験的な学習の工夫
- ・スモールステップで、できたことを褒める指導
- ・本時の学習内容が黒板（ホワイトボード）1枚におさまるような板書の工夫
- ・静粛な時間をつくるための教員の工夫

ウ 使用した教材

- ・分かりやすい表現を用いたプリント教材の活用
- ・写真や映像を用いたイメージしやすい教材の活用
- ・基礎的な知識や生徒の語彙を確認し理解させるための教材の活用

エ 授業の形態

- ・生徒の主体的な活動を重視した個別学習及び少人数によるグループ学習

（５）研究成果の評価方法

- ・上士幌町教育委員会をはじめとする上士幌町の関係者からの意見聴取
- ・PTAや学校評議員、上士幌町コミュニティ・スクール運営協議会メンバーからの意見聴取
- ・運営指導委員会による総括
- ・対象生徒及びその保護者に対してアンケート調査

4 研究の経過等

（１）取組の内容

平成30年度の制度化に向けた準備として、校内に「事業推進委員会」を組織し、具体的な実施計画の策定、及び事業の管理・運営を行う。また、上士幌町教育委員会との連携を推進するため、担当者による「関係機関担当者会議」を開催し、効果的な連携・協力の在り方、実際の「通級指導教室」による指導方法等について協議した。

ア 「通級指導教室」を設置、通級による指導及び研究（対象生徒2年生4名）

- ・生徒のアセスメントについて
- ・教材研究と教材の蓄積
- ・指導の工夫（校内研修及び校外研修）
- ・評価方法と評価の通知方法について

イ 事業推進委員会の実施（9回実施）

ウ 関係機関担当者会議の実施（5回実施）

エ 道内外の先進校視察

（神奈川県立茅ヶ崎高等学校、東京都立稔ヶ丘高等学校、市立札幌大通高等学校）

オ 他機関との連携についての研究

- ・関係機関視察（管内の中学校、特別支援学校、就労支援事業所等）
- ・H30年度の秋に実施する就学前相談について

- ・特別支援学校等で行われている就学前相談について
(実施時期、案内方法、相談内容、説明時の注意点等)
- ・望ましい就学前相談の実施について(中学校からの聞き取り等)
- ・中学校からの引き継ぎ方法(個別の指導計画等)について
- ・進路実現を目指した活動内容について
- ・進路先への引き継ぎ方法について
- ・進学・就労後の支援方法について(福祉機関等との連携)

カ 先進校視察による情報収集

- ・様々な生徒に対応した指導方法や指導内容について
- ・進路実現に向けてスキルアップさせるプロセスについて
- ・大樹高校及び本別高校の実践について(定期的に情報交換)

キ 「通級による指導」など、本校の取り組みの紹介

- ・視察の受け入れ
(秋田県立小坂高等学校、北海道広尾高等学校、音更町立音更中学校)
- ・各種研修会での発表等

(2) 評価に関する取組

ア 関係機関担当者会議による評価

イ 運営指導委員会による評価

ウ 関係者からの評価

- ・上士幌町教育委員会をはじめとする上士幌町の関係者からの意見聴取
- ・PTAや学校評議員、上士幌町コミュニティ・スクール運営協議会メンバーからの意見聴取
- ・対象生徒及びその保護者に対してアンケート調査

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

ア 通級による指導について

- ・2年次4名は、1年次より継続して「自立活動(スキルトレーニング)」に取り組んでいるため、見通しを持ち、落ち着いた環境で学習を行うことができた。
- ・生徒自身で個人目標を設定することで、「なりたい自分」をイメージし、意欲的に活動をする場面が増えた。
- ・生徒に合わせた支援を行うことで、「できそう」が「できる」へ、「できる」は「よりできる」へとステップアップすることができた。
- ・生徒の状況によって、教師の働きかけの強度や内容(ことばの種類や強弱など)を調整し、適度な負荷をかけることで、生徒のやる気を引き出すことができた。
- ・学校行事(職場体験や見学旅行など)と関連させ、ロールプレイなど実際の場面に近い状況で取り組むことにより、態度や言葉遣いなど、場面や状況に合わせて行うことができるようになり、自信と応用力を身に付けることができた。
- ・自立活動時は、担当者だけでなく全教職員が輪番で授業に入り、通常の授業と比較することで、生徒の様子の違いに気付いたり、つまずきを確認したりすることができるなど、今後の指導に役立つ研修の機会となった。

イ 近隣中学校への周知について

- ・ 自立活動担当者が、本校に在籍している生徒の出身中学校を訪問し、「高等学校における通級」について説明したことにより、直接、疑問や質問に答えることができた。
- ・ 十勝管内の中学校教員向けにアンケートを依頼し、52名から回答が得られ、実態を把握することができた。
(H29年7月末回収)
アンケートの結果から次のようなことがわかった。

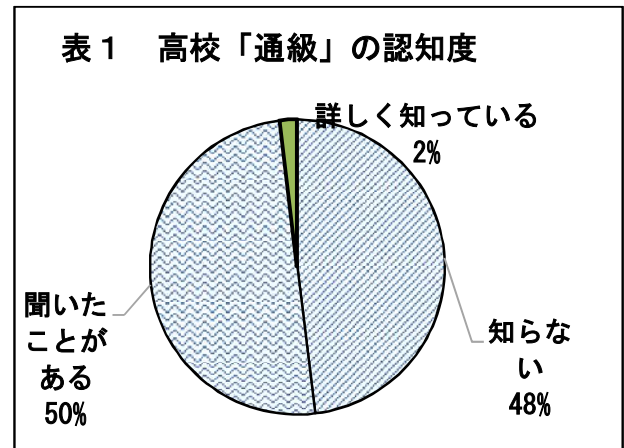
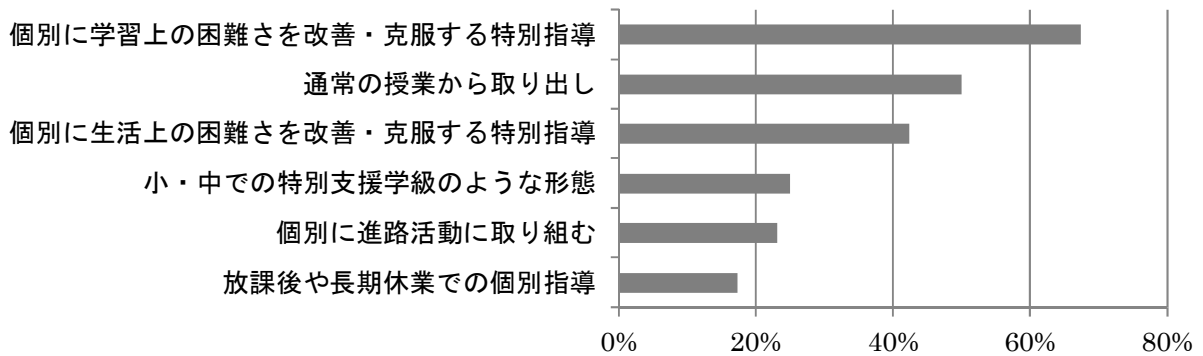


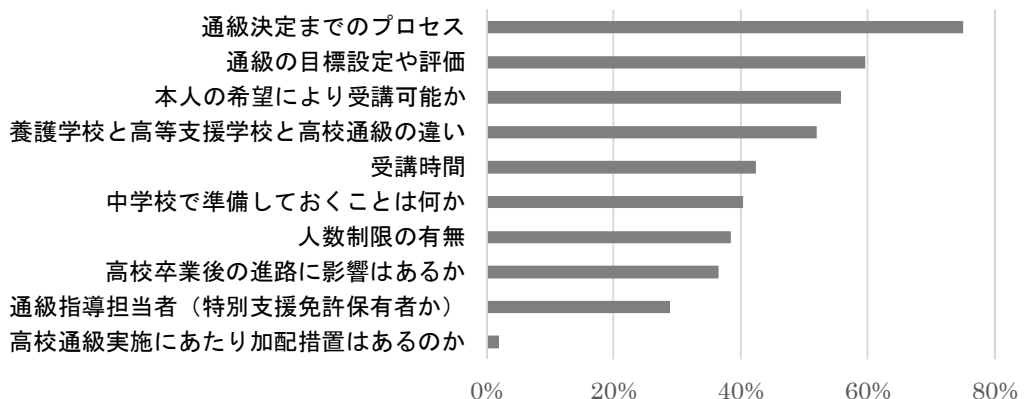
表2 高校「通級」のイメージ



高等学校における「通級」の認知度については、48%が知らず、50%が聞いたことがある程度であった。さらに高校「通級」のイメージを聞いたところ、表2のような結果となった。

中学校訪問時に聞き取り調査を行ったところ、数学や英語など苦手な科目について、通常の授業から取り出し、別室で個別に学習するイメージがあるという回答も多数みられた。

表3 中学校の先生が知りたいこと



中学校の先生が、高校「通級」に関して知りたいこととしては、「通級決定までのプロセスについて」が最も多かった。

そのため、早い段階で本校独自で計画案を作成し、見通しを示したが、H29年12月に北海道教育委員会から「道立高等学校等における通級による指導に係る基本的な考え方」が示され、それを受けて本校の計画を修正し、学校ホームページ等で公表できた。

- ・管理職による中学校訪問の際には、「高等学校における通級」について資料を持参して説明し、理解を図ることができた。
- ・報道発表を受けて、地域の中学校や高等学校から「高等学校における通級」について相談や問い合わせがあったため、計画より1年前倒して学校視察の受け入れや教育相談（就学前相談）を行い、準備を進めることができた。

ウ 他機関との連携について

- ・本校のこれまでの事例を文書にまとめ、今後の指導の手立てとなるようにした。
- ・自立活動担当者が、福祉機関や地域の事業所への訪問、各関係機関・事業所の開催する説明会や講演などに参加するなどして、直接顔を合わせて情報収集を行い、つながりをもつことができた。
- ・昨年度まで関係のある事業所などとは、継続してつながりをもつことができた。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

ア 「通級による指導」における「自立活動」の指導内容、指導方法、指導形態及び評価方法

- ・放課後通級（1単位）を実施したが、学校行事、諸会議、部活動の関係上、計画通り実施できない場面があり、長期休業期間で補充した。
- ・全職員が指導に入ることにより、通常の授業と比較することにより、生徒の様子の違いに気付き、今後の指導に役立つ研修の機会となったが、教員の誰もが通級の指導を担当できる状況にまで至っていない。
- ・生徒は、日によって新たな指導者が加わることに心理的不安が見られた。
- ・上士幌町子ども発達支援センター職員による指導の協力や上士幌町生涯学習センターを活用した自立活動は、社会的自立のトレーニングに繋がり、大変効果的であった。一方、学校と利用施設が離れているため移動に時間がかかることから、町のコミュニティーバスを利用することも可能となったが、バス停までの移動を踏まえると徒歩とさほど変わらなかった。

イ 近隣中学校への周知方法や対象生徒の決定に向けたプロセス

- ・本校に在籍している生徒の出身中学校へ文書の配布や、管理職・自立活動担当者による中学校訪問にて説明を行ったが、中学校からは「どの高校でも通級による指導が開始されるのか？」など、詳しく情報を知りたいとの要望があった。
- ・通級による指導を特別支援学級での指導と誤解する中学校が多いため、正確な情報を提示し、理解を求めていくことが必要である。
- ・中学2年次など早い段階から高校を見学し、教育相談を複数回実施する必要がある。
- ・中学校での個別の支援計画の作成と高校への引継ぎが必要である。

ウ 特別なニーズのある生徒の進路活動や進学先・就職先への引継ぎ

- ・人事異動で教員が入れ替わったとしても適切な対応ができるよう、これまでの本校

の事例をまとめ、今後の指導の手立てとする。

- ・高校在学中だけで全ての課題が解決する訳ではないため、高校卒業後、急激な環境の変化により不適応とならないよう、段階的に教師のサポートを減らし、友人や家族のさりげないサポートに移行することが望ましい。また、必要に応じて進路先や福祉機関を含めた地域と繋がることも必要である。
- ・医療や進学先などでは、高校からの引継ぎがあつたとしても、生徒本人と十分な関係を構築できない場合もある。

(3) 次年度に向けた準備状況

ア 教育相談（就学前相談）

- ・新聞報道の影響もあり、中学校より教育相談（就学前相談）の要望があり、1年繰り上げて実施した。
- ・教育相談の実施について、面談の手順、注意事項、記録の取り方、情報管理等整備できたため、今後は、校内研修等により、対応できる人材育成が急務である。
- ・中学生と保護者の願い、中学校での進路指導上の困難さなど、双方の相談を受けることができた。そこで、高校入学がゴールではないこと、将来就職することを見据えて何を優先して考えるべきかなど、本校入学生との事例を紹介しながら説明することができた。

[通級による指導に関して上士幌高校から中学校へお願いしていること]

- ① 中学校2年次の3月までに高校見学（1回目）
- ② 中学校3年次の8月までに高校見学（2回目）
本校へ入学した場合、配慮できることと、できないことを説明する。
- ③ 中学校3年次の12月までに高校見学（3回目）

イ 説明会

- ・中学校の先生向けの上士幌高校における通級による指導（自立活動）説明会、又は学習会の実施（H30年6月下旬予定）
- ・保護者向け説明会（H30年8月下旬予定）
- ・教育相談または体験授業（H30年9～10月予定）

ウ 入学生への周知

- ・学校ホームページに「通級による指導について」を掲載した。
- ・「通級による指導」決定までのプロセスを入学の手引きに掲載した。
- ・「通級による指導」に向けた事前の個人面談から、申請等に必要な手続きの文書を作成した。

エ 校内体制

- ・各学年に特別支援教育コーディネーターを配置し、週1回サポート会議を行い、学年間及び保健室に通級指導教室の情報共有を図ることができた。しかし、個別の指導計画に基づく指導目標の確認、定期的な評価にまでは至らなかった。いつ誰がどのように業務を行うか検討している。
- ・次年度に向け、校内業務の精選、明確な業務分担となるよう検討している。

オ 研修

- ・自立活動指導時、輪番制で全教員が指導に入ることによって「通級による指導」の研修の機会となった。
- ・外部機関での研修会等、全職員に案内し、積極的に参加していただき、年度末に研修報告会を実施する予定である。

カ 教材研究

- ・ H 2 6 年度から蓄積した教材を活用しつつ、新たな教材を作成した。授業の指導案の蓄積、指導の目的別に教材を活用しやすいよう整理・保管を進めている。